

酷暑を乗り切って“熱い演技”の数々

第五十六回医家邦楽祭を見る

歌舞伎座新築工事の影響も

あつて日本医家芸術クラブ伝統の「邦楽祭」も来季はお休みです。その理由からも邦楽部員にとつては、普段の年より力に入る舞台となりました。その熱演の数々を評論家の宮西芳緒氏によつて、以下に紹介してもらいました。

評 邦楽評論家 宮 西 芳 緒

平成二十二年の夏は異常だった。室内にいても夜でも熱中症が続出、盛んに省エネやエコが呼ばれる一方で、エアコン

は切らないようにと連日報道された。歳

の瀬に清水寺の舞台から中継される「今年の漢字」では、政治・経済の混迷を抑えて「暑」の一字が同寺の森清範貫主によって揮毫された。各地で数々の記録を更新した酷暑の夏を乗り切つて稽古を積んで来られた御出演の先生方にとって、この日の舞台は一入感慨深いものとなつたに違いない。



スポーツでも観客の声援に支えられる要素は大きいもので、自分たちはアマチュアの芸だが……だからこそ……「今まで倍して皆様の御声援をいただきたい」と観客に語りかける。

一、舞囃子（觀世流）『玄象』

医家邦楽祭の開幕の顔としてすっかり

定着した沢田又一先生（横浜市、耳鼻咽喉科）の大鼓と梅津淨子氏のシテによる一番で、横浜市医師会謡曲部の出演だが、今回はあいにく故障者が多く、地謡は北村みよし氏が（囃子方の助声を得ながら一人で務める。

「玄象」とは醍醐天皇の御世に「青山」「獅子丸」とともに中国から伝えられた琵琶の名器（曲中、村上天皇の靈が龍神に命じて龍宮より取り寄せ、藤原師長に授けるのは「獅子丸」だが）。沢田先生の衒いのないリードで、シテ（村上天皇の靈）は爽やかな早舞を渾みなく、淡々と演じ納めた。龍神を従える村上天皇のス

登場（写真右）しての「開会のことば」は、

ケールの大きな物語に想いを馳せる。

(写真⑤) 1番「玄象」



↓ 3番 長唄『外記猿』 秋葉則子

↑ 2番 長唄『岸の柳』 吉野則子

今回が二越劇場での初舞台、次の幕に
二、長唄『岸の柳』



出演される秋葉先生の誘いで「意を決して出演を決めたものの……」と謙遜される吉野則子先生（浦安市、内・小児科）は今藤美治郎師ほかと三味線を演奏する。唄は杵屋秀子師ほか。明治六年に東西両国の貸席で行なわれた浴衣ざらいに発表された曲。

「日本舞踊を習い始めて最初に踊った思い出のこの曲を三味線でも披露出来て、大変嬉しく思います」と吉野先生。夏の隅田川から両国の賑わいなど、後半に行くほどよく揃つて涼やかな一幕となつた。

三、長唄『外記猿』

続く秋葉則子先生（八千代市、内科）

も今藤美治郎師ほかと三味線を披露、杵屋秀子師ほかの唄。・日がな一日小猿を背負つて歩き、・猿の小舞を見せる猿曳の風俗を軽妙に聞かせる内容で、『傀儡師』『石橋』『翁三歳三番叟』とともに外記節復活を願つて作られた曲。

前年の『吾妻八景』に引き続いての出

演となる秋葉先生は「充分な稽古ができず、師匠方には心配をおかけしました」と語るが、気持ちを込めて丁寧に、落ち着いた演奏を聞かせた。

四、舞踊・常磐津『廓八景』

山梨県立中央病院と山梨厚生病院の看護院長でもあり、なお現役で医療を行なわれている飯田文良先生（笛吹市、外科



五、長唄『鞆猿』

杵屋勝・に子こと山崎律子先生（台東区、皮膚科）、日吉小間藏師ほかの唄、杵屋勝国師ほかの三味線で、囃子（笛、小鼓、太鼓、太鼓）が入る。

山崎先生はこの年、国立劇場や浅草公

会堂にも出演、長唄だけでなく舞踊も披露されている。この『鞆猿』は芝居の『鞆猿』（常磐津）から離れて長唄で聞かせる一曲。猿曳と子猿の奇禍と情愛を「一生懸命楽しく演じたい」という抱負の通り、

しつかりとした声で描き切る。

格調を整えた唄い出し、せりふから唄に渡す自然さ、打ち殺される鞭とは知ら

書の個展を開かれた由。

今回も榜付の素踊りで、拙き絃の調べ替え「から・瀬田の夕照いまここに」、「夕暮照らす仲の町」など近江八景に準えて吉原の四季を綴る一曲。振りのひとつひとつを克明に、いつに変わらぬ矍鑠とした舞台姿を印象づけた。



写真④
5番 長唄
『鞆猿』

ず無心に船漕く眞似をする子猿の哀れから、救かつて猿に舞を舞わせて、めでたく結ぶ段切れへと、スムーズに心地よく盛り上がり、拍手を集めた。

六、小唄四題

咲村鈴音^(写真④)と川口敷子先生（江東区、

看護科）の三

味線で計八

題が上演され

る小唄の、そ

のパート一。

ところが『中

州の思い出』

と『佃の渡し』を唄う予定だった宮田さ

た氏が夏から体調を崩された由、「舞台を

空けないために」と川口先生（写真④）が、

いつもの三味線だけでなく御自身の喉も

披露された。さりげなく穏やかな糸と唄

で、静かな情緒が湛えられた。



と『仲町育ち』
と『河太郎』
は加藤俊男氏
(写真⑤)
の唄で、
粋な仲町の賑
わいと、・い
い機嫌で・小

夜ふけて、月に遠音の村囃子^(写真⑥)に浮かれ
る河童の姿を描く。さらりとノッてゆく
糸の楽しさに耳を傾ける。



鞍馬山
に預けら
れた稚児

ひとりで
舞台を務
めること
に。

が生憎と出演が出来なくなり、佐藤先生
平野宏先生、近藤智雄先生、佐藤明徳
先生（いずれも練馬区、外科）の三人で
謡を務める予定が、平野先生と近藤先生
が『宝生透』『鞍馬天狗』

と『佃の渡し』を唄う予定だった宮田さ

た氏が夏から体調を崩された由、「舞台を

空けないために」と川口先生（写真④）が、

いつもの三味線だけでなく御自身の喉も

披露された。さりげなく穏やかな糸と唄

で、静かな情緒が湛えられた。

八、小唄四題

六、に続いて川口敷子先生の三味線に
よるパート二。

鈴木總明氏（写真⑦）は「邦樂祭で活氣

ある祭りの小唄を、一度は唄つてみたい」

という思いから『江戸祭り』

を、そしてもう一曲は『鶴

八鶴次郎』か

ら捨てし恋な

れど涙をこ

らえてほろ苦

い盃を干す

『心して』
邦樂祭には
久々の登場

となつた渡辺進氏（写真⑧）は『明鳥』の

纏綿とした芝居を聞かせる『川竹』と

伊達も喧嘩も江戸の花』と、清元から

採つたいなせで華やかな『神田祭』を唄

う。川口先生の暖かい糸が、優しく、それぞれの唄い手を包んでいる。

九、長唄『雨の四季』

(写真下)

杵屋正澄(己)こと高橋妙子先生(中央区、耳鼻咽喉科)、杵屋正園師ほかの三味線、稀音家康二郎師ほかの唄で、囃子(笛、小鼓、大鼓、太鼓ほか)が入る。

「この曲が大好き」という高橋先生は平成十二年、第四十七回の邦楽祭でも『雨の四季』を上演されている。そのときは踊りの師匠である藤間藤三郎師の振付で、もう一人の師匠・藤間藤朱師と先輩の裕麻師の立場の地を、高橋先生は務めている。



十、仕舞(喜多流)『熊坂』
七、の謡曲『鞍馬天狗』のメンバーとは「病院のお仲間」であり、毎回邦楽祭で仕舞を披露されている鈴木浩之先生(練馬区、外科)(写真上)が、今回はそのお仲間による『鞍馬天狗』と同じく牛若に因んだ演目『熊坂』を舞う。

牛若に討ち取られた大盗賊・熊坂長範の靈の話で、勇壮な牛若との一騎討ちのありさまに意気込みを見せる。

十一、小唄二題

今回は花柳界をテーマにした小唄二題、『夢の柳橋』と『青いガス燈』を山田新太郎先生(練馬区、整形外科)(写真上)が唄う。三味線は柴小堺也師。
・遠音に粹な新内の流しの舟と柳橋の賑わいを、もう一曲は

新橋至者の想いや銀座の風景を唄う、いわば大正ロマンの世界をひとつそりと描いた。

域が必要ですので一生懸命お稽古をしました」と語る。この曲の持つ新しい感覚が聞こえて来るようだ。

十一、長唄『都風流』

中島信子先生（中央区、眼科）
井康子師ほか



の唄、東音新

井康子師ほか

の三味線。明

治から大正に

かけての浅草

界隈の風物を

夏の隅田川の

情景から・歳

の市」まで組

唱式に綴る。

昭和二十二

年、第四百回

長唄研精会で

初演された曲。

中島先生は「短い曲ですので今回は独吟いたします。低音から高音まで幅広い音

十三、清元『夕立』

太田怜先生
(目黒区、循環器科)



太田怜先生
(目黒区、循環器科)

II写真(5)は、

いつも一緒に

語つてい

た同僚の晉

又淳先生が

休演のため

危うくひと

りで語ること

になると

こう、「私を

清元に引き

ずりこんだ

いまは亡き穂坂博明先輩の奥方とお嬢様

に無理に応援をお願いして」やつと出演の運びとなつたという。太田先生と穂坂美和子氏、清元延宗女仁師の淨瑠璃。清元延志左師、穂坂寿和子氏の三味線。いまでは「小猿七之助」の濡れ場の曲として有名な淨瑠璃。

年齢を重ねてこれらのまま芸に遊ぶ境地に近づかれていると察するが……「内容はかなり色っぽいもので、にもかかわらず間違なく唄うのが精いっぱいで、そのお色気までは唄いこなせないのがまた残念です」と太田先生は語る。

十四、長唄『多摩川』

東音前村八重子・杵屋和重こと前村

八重子先生（東村山市、小児科）、東音福

田克也師ほかの唄、杵屋栄敏郎師ほかの

三味線。笛が情緒を添える。

いつもは大曲を披露される前村先生が、以前にもみせてくれた「趣向だが、ここでは唄を、そして同じ曲を切十七、に三味線で披露する。毎回、その小柄なお身

体のどこから湧き出でてくるのだろう……
邦楽が好きでたまらないというエネルギー
一と、真摯な演奏姿に惹きつけられる。
ここではまず大薩摩の懐の広さ、そして
福田師の大きさと艶が素晴らしい、前村
先生のこころが映えた。



十五、舞踊・清元『神田祭』

小林勇先生（横浜市、産婦人科）＝写真
は得意の女形を素踊りで披露、今回は

祭り（申酉）と、神田明神の神田祭を描いたこの『神田祭』が双璧であろう。神田つ子の気風と下町情緒を湛えた曲を粹な芸者役でさらりと見せる。いつもながらの抑えた艶が滲む。

十六、舞踊・常盤津『松廻羽衣』

尾上菊尚こと大川尚美先生（横浜市、



十七、長唄『多摩川』

東音福田克也師ほかの唄、前村八重子先生＝写真次頁 杠屋栄敏郎師ほかの三味線。囃子（笛 小鼓 大鼓 太鼓）が入る。

やはり力強い大薩摩に始まり、六下り、本調子、二上りと、東京の上水道の水源をその・みなもとから・六所まつりの布晒しまで、変化に富んだ曲調を、福田師の情緒の深い唄を得て、前村先生が意氣高く弾く三味線が観客の耳を惹きつけた。

前村先生は「まだお子様が小さいとき、ご主人と連れだってよく多摩川の渓流を楽しましたそうで、久しぶりに静寂な

師の子息・尾上菊方師の伯子で、三保の松原の羽衣伝説を描いた作品を上演。

大川先生は尾上菊方師とよく息が合い、清潔な、尾上流らしい舞台を見せた。彼方を見送る伯子、そして一段に決まる夫女とが美しい絵面となつて幕を切つた。

やまあい、
山間の気分を求めて御岳まで足を伸ばされたそうです」とアナウンスがあつたが、そのあたり、この曲と深くこころが通じ合う選曲の妙が活きたようだ。

「最後まで聞いていただいてありがとうございました」と、「閉会のことば」を日本医家芸術クラブ・邦楽部委員の川口數子先生。出演者の高齢化を憂い、「来年



は公演が休みとなりますので、二年後にお会い出来ればと思います」……自分も小唄を教えているが、若い人に教えて底辺を広げて行きたいと語る。
進行は高橋妙子先生、司会は高松真弓氏。



▼ 長唄陣 主役をズームアップしました ▼

